

# 「お盆」

第1組 圓龍寺 藍川 竜司

毎年7月8月と言うと「お盆」のイメージがあります。亡き人をしのびお墓参りをされたり、お寺やご自宅で親族集まってお参りされる方も多いかと思えます。

「お盆」という言葉は、響きも可愛らしいですが、正式には「盂蘭盆会」と言いインドの言葉の「ウランバーナ」からきております。

ウランバーナを訳しますと「逆さ吊りの刑」と怖い言葉になります。

『仏説盂蘭盆経』が、今のお盆の元になっておりどの様なお経かと言うとお釈迦様のお弟子の目連尊者が、修行の末に手に入れた力、神通力を使い親孝行も出来ぬまま亡くなった母親が、今どうなっているか見ることにしました。すると、あの優しい母親が、餓鬼道の世界で逆さ吊りの刑で苦しんでいました。何とか助けようと神通力を使い綺麗な水や食事を口元に持っていくと母親が食べようとした途端に炎になり余計に苦しむ事になりました。何をしても助けることが出来ず号泣し、お釈迦様に母を助けて下さいとすがったところ、お釈迦様は

「汝一人の及ぶところにあらず（お前、一人で解決できる問題ではない）」

といわれ、安居といわれる研修会の最終日に、仏と仏弟子の仲間を呼び食事を振る舞えば母は助かると言われました。

このお経から私たちは何を教えて頂いたのでしょうか。

まず目連尊者は間違いを犯していました。長い修行で手に入れた神通力を皆を救うために使わず、自分だけの為に使ったこと。自分で助けられる自分の力で

けで何とかできるという思い。餓鬼道で他にも逆さ吊りで苦しんでいる人がいたはずなのに目を向けなかったこと。

私たちは自分中心に生きており「聞く」という人間にとって大切なものを見失っています。親鸞聖人も本願成就聞で

「聞其名号というは、本願の名号を聞くとのたまえり、本願を聞いてうたがうころなき」

と述べられ、教義を聞くのではなく本願の願いを素直に聞くことの大切さを教えてくれました。

『正信偈』に

「大悲 無倦 常照我（大悲ものうきことなく、常にわれを照らしたもう）」

いつも私に目を覚ませと願いをかけ続けてくれる。

亡き人や先祖に対してなにかを差し向けることだけでなく、今現に賜っている命の事実に向き合い自分自身を見つめなおしなさいと亡き人から教えてもらっているのではないのでしょうか。